

特別支援学校の生徒の 農業分野での活躍の場を広げるために

目次

➤ はじめに	P2
➤ ステップ1 農業に触れる —農業大学校での特別支援学校の生徒を対象とした農業体験をモデル的に実施—	P4
➤ ステップ1 農業に触れる —まとめ—	P12
➤ ステップ2 農業を学ぶ —特別支援学校の生徒を対象とした特例子会社における現場実習に関するヒアリング—	P14
➤ ステップ3 農業で働く —農業現場での就労に関するヒアリング—	P20
➤ ステップ2 農業を学ぶ・ステップ3 農業で働く —まとめ—	P24
➤ さいごに	P26

はじめに

特別支援学校の生徒の農業分野での就労の促進に向けて、「農業に触れる機会がない」「農業分野の現場実習の受け入れ先が見つけれない」「農業法人等の障害者受け入れへの理解醸成が必要」等の課題を解決するために、本事業で実施した内容やその効果等を取りまとめました。ぜひ活用いただけますと幸いです。

【ぜひご覧いただきたいページ】

特別支援学校の教員の皆様…p2～13、p14～17、p20～26

農業大学の教員など、農業体験の場を提供できる可能性がある皆様…p2～13、p26

特例子会社など、障害者の農業分野での雇用に関心がある皆様…p2～3、p14～26

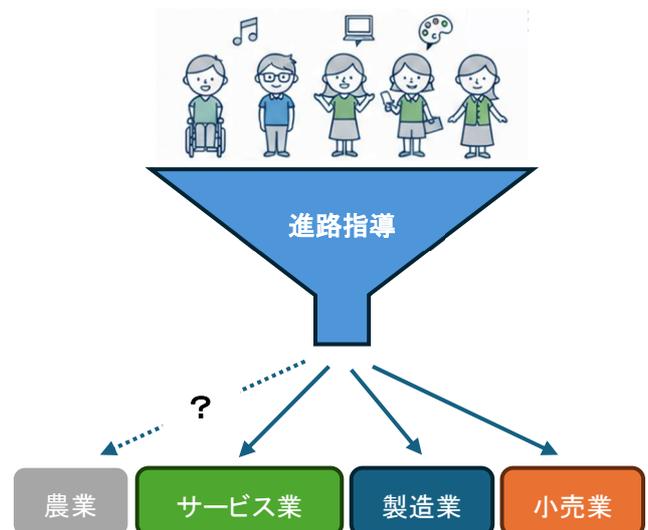
1. 農福連携とは

農福連携とは、農業と福祉が連携し、障害者の社会参画を促す取組です。福祉面では、障害者の賃金向上や働く場の確保に加え、農作業による自信や生きがいの創出が図られます。また、農業面でも、貴重な戦力の確保等による経営発展が期待できます。誰もが個性を活かし、可能性を最大限発揮できる「地域共生社会」の実現に資する取組です。

2. 本事業の目的

農業は作業工程が多岐にわたり、個々の障害特性に合った「仕事の切り出し」がしやすいという特徴があり、特別支援学校においては農業への興味や適性がある生徒が一定数存在するものの、農業体験の場や現場実習の受け入れ先を見つけられなかったり、受け入れ先の特例子会社や農業法人等の障害理解が不十分であったりするなどの理由により、生徒が農業を体験できる機会の確保や農業分野への就労については課題がみられるところです。

本事業は、農業大学校と特別支援学校との連携による農業体験の実施や、特別支援学校の生徒が現場実習を経て特例子会社に就職した事例のヒアリングを行い、その内容や効果を示すことで、特別支援学校から農業分野への就労促進を目的として実施しました。



3. 本事業における実施内容

まず、特別支援学校の生徒の農業分野での就労に向けたステップを「ステップ 1: 農業に触れる」「ステップ 2: 農業を学ぶ」「ステップ 3: 農業で働く」と整理しました。そのうえで、各ステップにおける取組方法やその効果を示すため、以下の取組を行いました。

ステップ1:農業に触れる

①農業大学校での特別支援学校の生徒を対象とした農業体験をモデル的に実施

【目的】

- ・ 農業大学校と特別支援学校の連携による農業体験を実施し、その内容や効果を発信することで、農業大学校の教員や特別支援学校の教員が連携を考えるきっかけとする。
- ・ 農業に興味を持つ特別支援学校の生徒に、実際に農業を体験してもらうことで、その魅力や可能性に触れてもらうとともに、その内容や効果を発信し、全国の特別支援学校が農業体験の意義等を知るきっかけとする。
- ・ 未来の農業の担い手となる農業大学校の学生が農業分野で障害者が活躍することの可能性を知るきっかけとする。

【内容】

三重県農業大学校の授業の中で、校内ほ場において、三重県立松阪あゆみ特別支援学校の高等部生徒の農業体験を実施

ステップ2:農業を学ぶ ステップ3:農業で働く

②特別支援学校の生徒を対象とした特例子会社における現場実習に関するヒアリング

③農業分野での就労に関するヒアリング

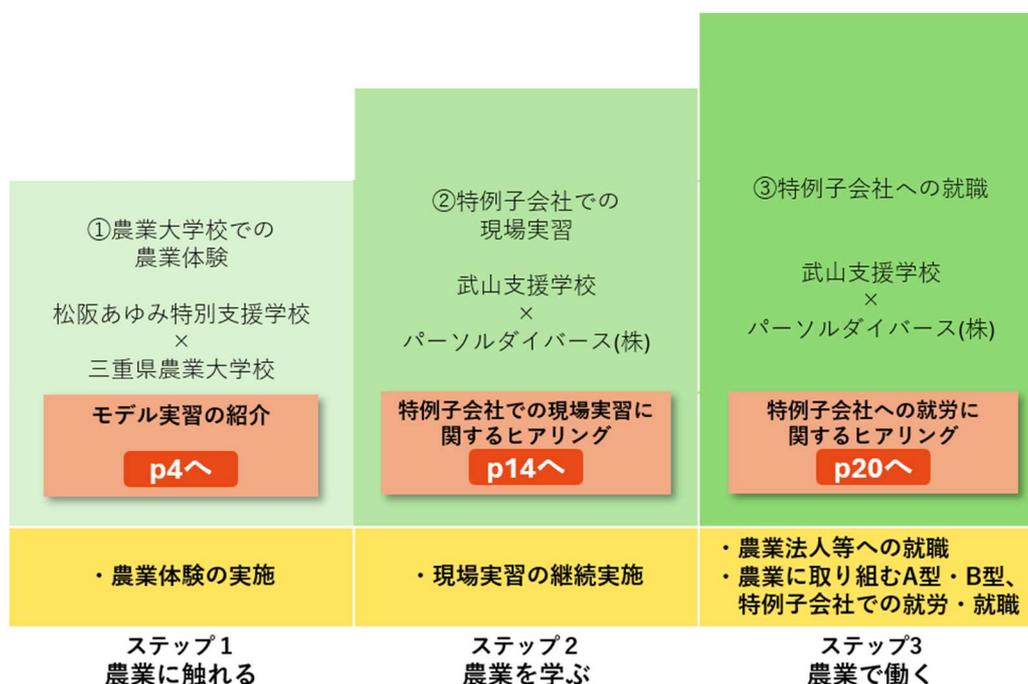
【目的】

特別支援学校の生徒が農業分野での現場実習を経て就労に至った経緯や、受け入れ側である特例子会社の視点等をヒアリングし、受け入れ先である特例子会社・農業法人等や全国の特別支援学校の教員に、その内容や効果を発信することで、全国の特別支援学校生徒の農業分野での現場実習と就労促進につなげる。

【内容】

武山支援学校津久井浜分教室の生徒が農福連携に取り組む特例子会社「パーソルダイバース(株)」へ、現場実習を経て就職した事例について、関係者へヒアリングを実施

特別支援学校の生徒の農業分野での就労に向けたステップと本事業の内容



ステップ1 農業に触れる

—農業大学校での特別支援学校の生徒を対象とした農業体験をモデル的に実施—

今回の事業では、複数の農業大学校に聞き取りのうえ、特別支援学校生徒の農業体験の受け入れができると回答のあった三重県農業大学校と、同市内にある三重県立松阪あゆみ特別支援学校にてモデル実習を実施しました。

◆実施校について

・三重県農業大学校(三重県松阪市)

水田作、茶業、野菜、花き、果樹、畜産に関する専攻コースを有する農業大学校です。農業に関する技術及び経営についての実践的な教育を行っています。二年課程と一年課程があり、就農や農業関連企業への就職などを目指して学んでいます。

農福連携に関する授業は「農業と福祉」という選択科目にて実施していますが、これまで、特別支援学校とのつながりはほぼありませんでした。



・三重県立松阪あゆみ特別支援学校(三重県松阪市)

知的障害を対象とする特別支援学校として三重県松阪市で平成30年に開校した学校です。

小学部、中学部、高等部の3つの学部を有し、高等部には、一般就労を目指す「社会自立コース」と福祉就労を目指す「生活自立コース」の2コースがあります。

生活自立コースでは環境整備班、窯業班、木工班、エコ班、手工芸班に分かれて週に2回、実習を実施しています。令和6(2024)年度までは、環境整備班にて、校内のほ場を活用して農作業も実施しておりましたが、校舎の改修工事に伴い、令和7(2025)年度は実施していません。

◆実施概要

三重県農業大学校の授業の中で、校内ほ場において、三重県立松阪あゆみ特別支援学校の高等部生徒の農業体験を実施

◆実習の位置づけ

- ・ 農業に興味を持つ特別支援学校の生徒に、実際に農業を体験してもらうことで、その魅力や可能性に触れてもらう。
- ・ 未来の農業の担い手となる農業大学校の学生が農業分野で障害者が活躍することの可能性を知るきっかけとする。

◆実習実施までの流れ

実習までに、三重県農業大学校と、三重県立松阪あゆみ特別支援学校間で、以下のとおり打合せを行いました。農業体験を実施される際の参考としてご活用ください。



実習実施までに打合せや確認をした項目

- ・ 農業体験を実施する日付、時間帯
- ・ 移動手段
- ・ 作業内容、作業の指示の仕方(誰が作業を説明するか)
- ・ 会場の特徴(歩きやすさ、過ごしやすさ、危険物の有無など)
- ・ 服装、靴、帽子の確認
- ・ 撮影許可(※撮影を実施する場合のみ)
- ・ 運営体制
- ・ 会場下見の日程
- ・ 費用(体験の中で使用した野菜・花きの買取要否、圃場使用料の有無)
- ・ 特別支援学校生徒の保護者への農業体験実施に関するご案内内容

◆実施日時

令和7年12月15日(月)、12月22日(月) 各日 10:00～11:20

◆開催場所

三重県農業大学校

◆実習対象

三重県立松阪あゆみ特別支援学校 高等部

◆参加生徒

- ①12月15日(月):社会自立コース 1年生 4名
- ②12月22日(月):生活自立コース 環境整備班 1～3年生 9名

◆移動手段

三重県立松阪あゆみ特別支援学校のスクールバス

◆実習内容

花きコース(参加人数:①2名、②4名)

野菜コース(参加人数:①2名、②5名)

※農業大学校の通常の実習の授業の中で実施。

特別支援学校生徒1名につき、農業大学校の学生1名がサポートする形で実施。

※作業の説明は、農業大学校の教員が実施。

実習内容:野菜コース(ミディトマトの収穫～袋詰め)

工程・動き		所要時間
<p>◆トマト収穫、調整の説明 教室にて、農業大学の教員から以下について説明。 ・実習全体のスケジュール ・収穫するトマトの色味 ・ハサミを入れる位置 ・収穫したトマトを置く場所 説明後に、教室からトマト栽培のハウスへ移動。</p>		5～10分
<p>◆収穫 農業大学の学生が先に手本を見せ、教室で説明されていたことを再度、特別支援学校の生徒に伝達。特に色味の違いについて丁寧に説明。 生徒は真っ赤なトマトを見つけ、収穫してよいかを学生に確認後、ハサミを使って収穫。 ヘタの余分な長さをカットし、コンテナに入れる。</p>		15～20分
<p>◆選別 学生から、出荷できないトマトの特徴を説明したあと、生徒と共に1つずつ確認。 生徒がトマトに異常を見つけた際は、出荷の可否を、都度学生に確認。 見つけた異常が汚れだった場合は、布を使って汚れをふき取り、出荷するトマトとして仕分ける。</p>		
<p>◆計量 仕分けたトマトがおおよそ150グラムずつになるよう、はかりにトレーを載せ、トマトを1つずつ載せながら重さを確認し、分ける。 150グラムを下回らないよう、学生が付き添い、150グラムを上回った場合の可否は、学生が都度判断し、伝える。</p>		合わせて 15～20分
<p>◆袋詰め トレーに載ったトマトを出荷用の透明袋に入れ、シーラーで封をする工程を学生がやってみせる。 生徒が袋を捻じり過ぎた場合には、都度アドバイス。また、シーラーを使う際の力の使い方については、最初にコツを伝えた後、都度アドバイス・フォローを実施。</p>		
<p>◆振り返り 教室にて、生徒から実習の中で印象に残ったことや感想を、農業大学の教員や学生に共有。 お礼をして、解散。</p>		5～10分

上記を実施した上での関係者からの声

- ・ 作業をマンツーマンで実施できたのが良かった (農業大学校学生)
- ・ 工程が複数あるため、もっと体験の時間を延ばせると良い (農業大学校教員・学生・特別支援学校生徒共通)
- ・ 収穫するトマトの色が分かりやすいよう、色の基準がわかるボードをコンテナの近くに貼れると良い (農業大学校学生)



実習内容:花きコース(ビオラ・パンジーの寄せ植え)

工程		所要時間
<p>◆寄せ植えについての説明 教室にて、農業大学の教員から以下について説明。 ・実習全体のスケジュール ・寄せ植えの方法 ・取り扱う花の種類 説明後に、教室から作業を実施するハウスへ移動。</p>		5~10分
<p>◆鉢に土を入れる 農業大学の学生が手本を見せ、教室で説明されていたことを再度、特別支援学校の生徒に伝達。 生徒1人につき、1つの鉢植えを完成させる。 スコップで、土を鉢の半分くらいまで入れる。 鉢の準備ができれば、寄せ植えをする苗を生徒に選ばせる(ビオラ、パンジー)</p>		
<p>◆苗をポットから出し、鉢に入れる 人差し指と中指の間に苗を入れてひっくり返す。 手のひらで苗を上下逆さまの状態を持ち、花が上に来るようにひっくり返しながらかつ鉢の中に苗を入れる。 2つの苗が並ぶように入れる。</p>		合わせて 15~20分
<p>◆土を足して固定する スコップに土を取り、苗の生え際を軽く持ち上げ、土を足し入れる。 軽く押さえて、苗を固定する。 本来では、このあと水やりをするが、鉢を持ち帰る都合上、重くなったり水が漏れたりすることを防ぐため、特別支援学校に帰ってからたっぷり水をやるように指示した。</p>		
<p>◆振り返り 教室にて、生徒から実習の中で印象に残ったことや感想を、農業大学の教員や学生に共有。 お礼をして、解散。</p>		5~10分

上記を実施した上での関係者からの声

- ・ 作業が少なかった(特別支援学校生徒)
- ・ 作業がスムーズに進んだ際の、追加作業を考えておくと良い(農業大学教員)
- ・ 作業内容の工程を分かりやすくしてほしい(特別支援学校生徒)



【実習の振り返り(農業大学・特別支援学校のアンケート結果を踏まえて)】

農業大学校

◆実習内容をよりよくするための工夫

- ・ トマトの収穫などでは、収穫に適した色などの指標を作業場の見える場所に掲示できると良い。
例えば、トマトの場合、真っ赤な赤と、オレンジがかった赤がある。収穫に適した色を判断するために、都度学生の助言が必要だったため、色の指標をコンテナ付近に掲示できるとよりスムーズに運営ができそうである。
- ・ 2つの班に分かれて実習を行う際は、作業のボリューム調整や時間が余った際の作業を予め想定しておくが良い。
- ・ トマトの収穫～袋詰めについては、工程が複数あるので、1つ1つの作業時間が短く感じられたという声が多かった。
- ・ ハウスでの作業は暑さを感じやすい為、適宜休憩を挟む等の配慮があると良い。

実習後のアンケート結果(特別支援学校生徒(n=13))

①農福連携についてのイメージをお聞かせください。

	とても良い	良い	ふつう	あまりよくない	悪い	知らなかった
実習をやる前	4	7	2	0	0	0
実習をやった後	9	3	1	0	0	0

②農業をやったことがありましたか。

はい	いいえ
8	5

③今回、実習をして農業をもっとやりたいと思いましたか。

とてもやりたい	やりたい	どちらとも いえない	あまり やりたくない	やりたくない
1	5	2	0	0

③今回、実習をして農業をもっとやりたいと思いましたか。

とてもやりたい	やりたい	どちらとも いえない	あまり やりたくない	やりたくない
0	3	1	1	0

④将来農業で働きたいと思いますか。

	とても働きたい	働きたい	働きたくない	分からない	未回答
実習をやる前	2	3	0	7	1
実習をやった後	1	7	1	4	0

⑤今後もこのような実習をやってほしいですか。

やってほしい	やってほしくない
12	1

【一部抜粋】

⑥今回の実習の良かったところはどこですか。

- ・ 収穫をしているときに上手だとほめてもらったのが良かったです。
- ・ トマトの色で収穫するタイミングを知れた。
- ・ 学生の方が優しく教えてくれたので分かりやすかったです。
- ・ 花の良いところを教えてもらったのが良かったです。

⑦今回の実習で改善した方が良いところはどこですか。

- ・ いろんな花をもっと知りたい。
- ・ 収穫や袋詰め楽しくて時間が経つのが早く過ぎたので、もっとしたかった。
- ・ もう少し人数を増やした方がよいと思いました。
- ・ どうしたらいいのかわからない時が少しあった。
- ・ 作業内容の工程の説明を分かりやすくしてほしい。
- ・ 見る時間が多くて作業量が少なかった。

⑧全体の感想をお聞かせください。

- ・ 農業大学校の印象がとても良かったです。
- ・ 今回でとてもよい体験になりました。
- ・ 今回の実習で農業に自分は向いていないことが分かった。
- ・ 楽しかったです。
- ・ 農業大学校の先生や学生さんがとても優しく教えてくれたので、分かりやすいいい時間になりました。

■アンケートから得られる考察

生徒のほとんどから、「今後も実習をやりたい」と回答が得られました。また、「将来農業で働きたい」と思った生徒は実習前では5名だったのに対し、実習後は8名に増加しました。このような実習は農業を知る機会になったと考えられます。

実習後のアンケート結果(農業大学校学生(n=10))

①農福連携についてのイメージをお聞かせください。

	とても良い	良い	ふつう	あまりよくない	悪い	知らなかった
実習をやる前	1	4	4	0	0	1
実習をやった後	4	5	1	0	0	0

②将来は農業に関する仕事をやりたいですか。

はい	いいえ	わからない
10	0	

③(②で「はい」と答えた場合)その際に農福連携に取り組んでみたいと思いますか。

はい	いいえ	わからない
4	3	3

④(③で「はい」と答えた場合)そう考えたのはいつ頃からですか。

今回の実習がきっかけ	今回の実習より前から思っていたが、今回の実習でより思いが強くなった	今回の実習より前から思っており、思いの強さに変化はない	その他
2	1	1	0

⑤今後もこのような実習をやってほしいですか。

やってほしい	やってほしくない
10	0

【一部抜粋】

⑥今回の実習の良かったところはどこですか

- ・ 農福連携についてピンときていなかったが、今回の実習で少し理解することができました。
- ・ 将来、農業に関わる機会を提供できたのではないかと思います。
- ・ はじめての方と一緒に作業しながらコミュニケーションを取れたところが楽しかった。
- ・ 農福連携をしていく上で、どのようなことに気を付けなければならないかや、どのように説明すれば伝わるかといったことを考えるきっかけになった点良かった。
- ・ 生徒の皆さんが最後に感想を述べてくれたのが良かった。

⑦今回の実習で改善した方が良いところはどこですか。

- ・ 事前にもう少し情報が欲しい。
- ・ もう少し長めに時間を取った方が良いと思いました。いろいろな農業体験を増やしてはどうかと思います。
- ・ 人数に関してはマンツーマンでできるのが望ましい。また実習時間そのものを長くしてほしい。
- ・ 赤いマトを収穫するという指示が抽象的で戸惑っている生徒がいたため、色の基準のボードをコンテナの近くに貼るなどの配慮があればより良かったように感じた。
- ・ 簡単な作業だったのと、1人に1人ついていたので困ることはなかった。

⑧全体の感想をお聞かせください。

- ・ とても良い生徒さんたちで、私たちも楽しむことができました。
- ・ はじめてのことでも積極的に挑戦している姿を見て、見習って私も色々なことに挑戦してみようと思いました。
- ・ もう少し障害の重い方をイメージしていたので実用的かどうか懸念があったが、全然そんなことなく、工夫すれば安心して働いてもらえるという可能性を感じた。障害の重い方でも配慮や工夫次第で才能を生かせるかもしれないという意識が変わった。

■アンケートから得られる考察

学生全員から、「今後も実習をやりたい」と回答が得られました。また、農福連携の取組を希望する学生は4名で、そのうち3名が今回の実習をきっかけに「将来農福連携に取り組みたい」という気持ちが向上したとの回答でした。障害者とコミュニケーションを取りながら作業を進める体験を通じて、農福連携の取組のイメージをつかむ機会になったと考えられます。

実習後のアンケート結果(農業大学校教員(n=4))

①農福連携についてのイメージをお聞かせください。

	とても良い	良い	ふつう	あまり よくない	悪い	知らなかった
実習をやる前	0	2	2	0	0	0
実習をやった後	2	2	0	0	0	0

②今後もこのような実習をやっていきたいですか。

やっていきたい	やっていきたくない
4	0

【一部抜粋】

③今回の実習に対する農業大学校の学生の反応はいかがでしたか。

(実習前)・どんな障害があるのかわからなかったので、自分が考えている接し方で良いのか不安そうだった。
 ・学生は小中学生の時から学校で障害のある方と接してきているためか、特段緊張している様子は見られなかった。

(実習後)・作業が丁寧、スムーズにできていて良かったという声がありました。
 今回は1時間だけでしたが、作業時間が長くなったらどうなるかという声がありました。
 ・自分の声がけがうまく伝わり、実習前の不安は払しょくされたようだった。

④農業大学校の学生が将来農福連携に取り組むことについての考えをお聞かせください。

- ・いろいろな人たちと交流できることや、作業を教えるという経験ができてとても良かった。
- ・農業を取り入れている作業所の指導員として働くなど、職業選択の幅が広がると感じている。
- ・学生は選択制ではあるものの、「農業と福祉」の授業を受け、農福連携について学んでおり、農福連携に取り組む法人への就職を希望する学生も一定数いることから、農大はそのバックアップをしていくべきと感じている。

⑤今回の実習の良かったところはどこですか。

- ・普段、障害のある方とあまり接触することがないが、このように一緒に作業することで、障害のある方の特性など、より深く理解するきっかけの一つになったと思う。
- ・学生と生徒が共に作業したことで、交流することについて、更に心理的障壁が低くなったと感じる。

⑥今回の実習で改善した方が良いところはどこですか。

- ・時間が短かったこと。障害の程度がどのくらいかをもう少し特別支援学校と打ち合わせができていれば良かったです。
- ・特別支援学校で農作業に取り組んでいるのかどうかなど、会話のきっかけとなる情報が事前にわかっているとさらにコミュニケーションが深まると思う。
- ・時間を余らせてしまったので、追加作業について想定しておくべきだった。

⑦全体の感想をお聞かせください。

- ・農大生、教員も緊張していたが、実習がスムーズにできて良かったです。今後はトマトの収穫以外も体験してほしいです。
- ・特別支援学校の生徒さんも慣れない場所、環境にも関わらず、指示をしっかりと聞いて行動してくれて良かったです。

■アンケートから得られる考察

実習の前後で比較すると、「農福連携に対するイメージ」が向上しました。また、教員の全員から「今後も実習をやりたい」という回答が得られました。特別支援学校との連携により、障害理解や農福連携に関する理解が深められたことがうかがえます。

また、事前に特別支援学校の生徒の情報を十分に収集できていれば、不安の軽減や、当日のコミュニケーションを深めることができたため、生徒の特性や普段の学校での取組などをヒアリングできるとよりよい実習運営に繋がられると考えられます。

生徒の状況や特別支援学校のスケジュールに応じて、実習の長さや作業内容を調整し、一度の来訪で複数の作業を体験できる工夫も考える余地がありそうです。

実習後のアンケート結果(特別支援学校教員(n=2))

①今後もこのような実習をやっていききたいですか。

やっていきたい	やっていきたくない	未回答
0	1	1

【やっていきたくない理由】本来掃除を学習している集団であるため。

【一部抜粋】

②実習や農業に関する生徒の様子・反応をお聞かせください。

(実習前)楽しみにしていた。

(実習後)トマトを持ち帰れたのは成果があったようで喜んでいました。

④今回の実習の良かったところはどこですか。

・農業大学校学生が優しく丁寧に教えてくれたのが、生徒にとって良かった。

⑤今回の実習で改善した方が良いところはどこですか。

・可能であれば、時間を延ばさず2つの作業ができて良かった。

⑥全体の感想をお聞かせください。

・このような体験は貴重であり感謝します。ただ現場としては2~3か月前の校外学習としては対象生徒、日程、内容調整、年間計画、学習指導内容等を合わせることが難しかった。

■アンケートから得られる考察

特別支援学校の教員からは、今後の実習実施について「やっていきたくない」、「未回答」との回答となりました。学校としてのカリキュラム上、今回の実習は突発的な取組となってしまう、現場の負担が増える結果となりました。円滑な実習運営のためには、**新年度の計画中に前もって企画を進めることが重要です。**

一方、実習後に生徒がトマトや寄せ植えを持ち帰れた点については、生徒の成果や実習の実感につながっていたようである、という回答から、**成果物を持ち帰るという要素を実習に加えると、特別支援学校の生徒の印象にも残りやすいのではないかと考えられます。**

また、農業大学校の学生や教員が優しく接してくれたことについては、特別支援学校の教員・生徒それぞれから言及があったため、**農業大学校側の姿勢が実習の満足度につながったことが示唆されました。**

◆アンケート結果を踏まえて

農業大学校の学生及び教員・特別支援学校の生徒からは今後も実習を実施したいという声が多く集まりました。特別支援学校の教員からは「やっていきたくない」「未回答」との回答であったものの、農業体験の特別支援学校の生徒への効果は感じられているようでした。

農業大学校と特別支援学校の連携による農業体験の実施は、双方にとって意義のある取組となり得ることが考えられます。

ステップ1 農業に触れる —まとめ—

今回のモデル実習の結果を踏まえて、円滑に実施するためのポイントと農業体験の効果をまとめました。

農業大学校で特別支援学校の生徒の農業体験を円滑に実施するためのポイント

特別支援学校

農業大学校

①早期の調整

学校では学習指導要領を踏まえた教育課程を、前年度に編成いたします。

今回は、モデル的に実施したため短期間で準備いただきましたが、円滑な実施のためには、前年度から双方の調整を行うことが重要です。

②事前に確認しておくこと

・移動手段

特別支援学校の生徒や職員が来訪する際の駐車場所や実習場所への導線について、事前の打合せや下見の際に確認できると良いでしょう。足場の悪い場所があれば事前にルートを確認しておくなどの準備ができると安全な実習運営につながります。

・ハサミなど実習中に使用する道具

作業で使用する道具については、特別支援学校の生徒が使用して問題が無いか事前に確認しておくことと安全に配慮した実習運営につながります。

・作業内容・指示方法

作業内容や指示方法は、特別支援学校と農業大学校双方で事前共有しておくことが重要です。

今回のモデル実習では、農業大学校教員から「特別支援学校の生徒に指導したことがないため、その辺りが不安」との声があったため、打合せにて、どのような形が良いのか事前に調整しました。

・生徒に関する情報

個人情報の取扱いに留意したうえで、特別支援学校生徒の障害の状態など、生徒に関する情報を事前に農業大学校に共有しておくことで、コミュニケーションの取り方などを予め考えることができ、安全でスムーズな実施につながります。

・その他、不安事項の解消

特別支援学校、農業大学校双方の不安を事前に共有し、可能な限り解消しておくことが円滑な実習運営につながります。

③実習の効果を高めるために効果的な方法

・成果物の持ち帰り

収穫物や寄せ植えなど、自分で取り組んだ成果物を持ち帰ることは、“できた”という実感につながり、特別支援学校の生徒の達成感を高めることに効果的です。

ただし、農業大学校の青果や花きには、種代や肥料、ポットなどの費用がかかっており、本来販売する生産物を実習で取り扱った場合、買取が発生する可能性があります。

事前に農業大学校側に確認すると良いでしょう。

・マンツーマン体制

特別支援学校の生徒1名に対し、農業大学校の学生1名がサポートするマンツーマン体制は、作業をスムーズに進められるだけでなく、双方の理解が深まり、実習の質が高まる効果があります。

・振り返りの時間を確保

振り返りの時間を設け、特別支援学校の生徒から感想を聞くことで、生徒自身が学びを整理できるだけでなく、その気づきや反応を農業大学校の学生・教員、特別支援学校の教員と共有する機会にもなります。

農業大学校で特別支援学校の生徒の農業体験を実施することの効果

特別支援学校

①生徒の進路の選択肢が広がる

農業体験は、特別支援学校の生徒が新たな興味や自分の適性に気づく機会となり、進路の選択肢を広げる効果があります。今回のモデル実習では、農業未経験の5名のうち3名が「農業をもっとやりたい」と回答しており、初めて農業を経験したことで、新たな興味に気づく機会となりました。また、「将来農業で働きたい」と回答した生徒は、実習前の5名から実習後は8名に増加しており、実習を通して農業への関心や適性を確認できたことが、この変化に影響したと考えられます。

一方で、「農業は自分に向いていないと分かった」という生徒もあり、実習が自身の向き・不向きを知る機会としても有効であることが明らかになりました。

②生徒の意欲の向上

農業体験は、実際に手を動かし、作業を成し遂げることで成功体験を得られるため、生徒の意欲向上に寄与します。今回のモデル実習では、「農業をもっとやりたい」と回答した生徒が9名おり、実際の農作業経験が意欲の高まりにつながったと考えられます。また、「褒めてもらえたことが良かった」という声もあり、第三者から認められる経験が、生徒の自信の向上に寄与する可能性も示唆されました。

③将来の就労の拡大につながる(農業大学校の学生の障害理解)

農業大学校の学生が特別支援学校の生徒とともに作業することで、障害理解が深まり、将来、より理解ある職場環境の充実につながります。これは、特別支援学校生徒にとって、農業分野への就労の拡大につながる可能性があります。

農業大学校

①障害理解が深まる

農業大学校では、普段、障害者と接する機会が多くないため、農業体験の実施は障害理解を深める貴重な学びの機会となります。今回のモデル実習では、「接し方が分からない」という不安が、特別支援学校の生徒との作業を通じて解消され、障害理解を深める機会となりました。また、学生からは「もっと重い障害を想定していたが、実習を通して『工夫すれば安心して働いてもらえる』という可能性を感じた。障害の重い方でも配慮や工夫次第で才能を活かせるかもしれないという意識が変わった」という声もあり、農業分野で障害者が活躍できる可能性を知るきっかけとなりました。

②学生の将来の農業分野での働き方の選択肢が広がる

農業大学校の学生にとって、障害者と一緒に農作業を実施することは、将来、農業分野でどのように働くかを考えるうえで、新たな選択肢を知る機会となります。今回の実習では、「将来農福連携に取り組みたい」と考える学生が生まれ、すでに関心を持っていた学生からも「今回の実習でより意欲が高まった」との声があり、農業分野における働き方の選択肢が広がる結果となりました。

農林水産省 HP では、農業大学校における特別支援学校を対象とした取組や、相談の可否などをとりまとめた一覧を掲載しています。

▼特別支援学校の生徒の農業分野での就労促進

https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/tokushi_syuurou.html



ステップ2 農業を学ぶ

—特別支援学校の生徒を対象とした特例子会社における現場実習に関するヒアリング—

今回の事業では、複数の特例子会社に聞き取りのうえ、特別支援学校の生徒の現場実習の受け入れ実績や就職実績のある特例子会社「パーソルダイバース(株)」と、社員の出身校である「神奈川県立武山支援学校」にヒアリングを実施しました。

◆パーソルダイバース(株)

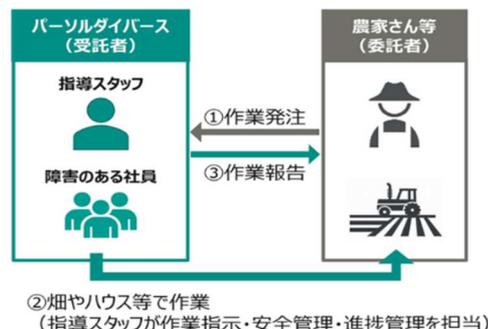
(東京都港区、代表取締役社長 渡部 広和)

総合人材サービスを展開するパーソルホールディングス株式会社の特例子会社として平成20年に創設。特例子会社としてグループ各社から業務を受託するほか、農福連携にも注力しています。地域の農家から農作業を受託し、指導スタッフ1名、障害のある社員3~6名で編成された1チームが、農家の畑やハウスに赴き、圃場整備や苗の定植、収穫などの農作業を行う「援農モデル」を展開しています。「援農モデル」は神奈川県横須賀市(※)や群馬県前橋市で展開しています。

(※)神奈川県横須賀市で農福連携に取り組むパーソルダイバース(株)

よこすか・みうら岬工房 社員数:65名(うち障害のある社員49名)

【援農モデルのイメージ】



パーソルダイバース株式会社
よこすか・みうら岬工房について
以下にて紹介しております。

▼企業版 農福連携取組事例集
<https://x.gd/O2GpM>



■特例子会社とは…

企業が障害者の雇用を促進する目的で作る「子会社」のことです。障害者の雇用の促進等に関する法律により、従業員40.0人(令和8年7月以降37.5人)以上を雇用する事業主は、雇用する従業員の2.5%(令和8年7月以降2.7%)以上を障害者とするよう、義務付けられています。事業主が、障害者の雇用に特別の配慮をした子会社を設立し、一定の要件を満たす場合には、特例として、その子会社に雇用されている従業員を親会社に雇用されているものとみなして雇用率に算定することができます。これを特例子会社制度といいます。

参考:特例子会社の数 631社(令和7年6月1日時点)

▼参考:厚生労働省 HP

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisa_kunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jigyounushi/page10.html



◆神奈川県立武山支援学校(神奈川県横須賀市)

小学部、中学部、高等部があり、知的障害部門と肢体不自由部門があります。高等部知的障害部門の教室は神奈川県立武山支援学校内にあるほか、神奈川県立津久井浜高等学校内に武山支援学校津久井浜分教室があります。同校の生徒は主に一般企業、特例子会社に就職するほか、障害者就労施設へ就労することもあります。農業分野への就職は令和2(2020)年以降、令和7年度を含め3名実績があります(うち2名がパーソルダイバース(株)への就職)。

◆パーソルダイバース(株)と神奈川県立武山支援学校の関わり

平成30年に、パーソルダイバース(株)のよこすか・みうら岬工房が開所。同社から近隣の特別支援学校の校長宛に開所の案内・挨拶を実施。

令和2(2020)年度の採用意向を平成30年春頃に各校へご案内し、その年の現場実習で、神奈川県立武山支援学校の生徒を受け入れたことをきっかけに連携が始まり、令和3(2021)年春と令和4(2022)年春にそれぞれ神奈川県立武山支援学校より1名ずつ入社実績があります。

◆ヒアリングの目的

特別支援学校の生徒が農業分野での現場実習を経て就労に至った経緯や、受け入れ側である特例子会社の視点等をヒアリングし、受け入れ先である特例子会社・農業法人等や全国の特別支援学校の教員に、その内容や効果を発信することで、全国の特別支援学校に通う生徒の農業分野での現場実習と就労促進につなげる。

◆ヒアリング事例

武山支援学校津久井浜分教室の生徒が、在校時に、農福連携に取り組むパーソルダイバース(株)の現場実習を経て、卒業後、同社に就職して、農業に取り組む事例

◆ヒアリング対象(敬称略)

- ・ 特別支援学校卒業生、特例子会社社員：
パーソルダイバース(株) よこすか・みうら岬工房長沢 清水元我
- ・ 特例子会社：
パーソルダイバース(株) よこすか・みうら岬工房マネジャー
- ・ 特別支援学校 進路指導担当教員：
神奈川県立武山支援学校 進路支援グループ 石黒祐光
- ・ パーソルダイバース(株)が業務受託している農家の1人：
(株)ピーカブー 石井 亮

◆ヒアリング日

令和7年12月19日(金)

ヒアリング結果

① 神奈川県立武山支援学校のキャリア教育・支援の取組

卒業後の就職を目指す生徒が在籍する神奈川県立武山支援学校高等部では、就職に向けた支援が以下のような流れで実施されています。

1年生	2年生	3年生	卒業後(3年間)
働くことを知る	適性を選ぶ	企業を絞り込む 就職先を決める	働く アフターフォロー

学年ごとに実施される就職に向けた体験や実習は以下のとおりです。

(※それぞれの内容の詳細はp18~19をご参照ください)

	前期	後期
1年生	職業(授業科目):農園芸班と革工芸班どちらの内容も経験	
2年生	職業(授業科目):農園芸班又は革工芸班のどちらかを選択 グループ実習[7月] (3日間ずつ×3企業)	現場実習[11月] (3~10日間) 進路面談[12月]
3年生	現場実習[7月] (3~10日間)	現場実習[11月] (3~10日間) 雇用手続き

現場実習は、企業からの提示に合わせた期間で行う

清水さんが就職するまでの道のり

学年	内容
1年生	職業(授業科目):農園芸班と革工芸班どちらの内容も経験
2年生	<p>職業(授業科目):農園芸班に属し、校内の畑にて農作業を実施したことをきっかけに農作業に興味を持つようになる。</p> <p>自分で種を撒いて、育て、収穫をすることが多く、その過程を見たり体験できることや、身体を動かすことが好きなので、農作業を通じて身体を動かせることが良かったです。</p> <p>清水さん</p>
	<p>前期にグループ実習を実施。(実習先:企業(事務職)、老人介護施設、学童保育所)</p> <p>後期の現場実習では、農業分野での実習を希望したが、実習先がなく、輸出関係企業で梱包等、倉庫内作業の会社で実施。</p> <p>清水さんは、お弁当屋でアルバイトをしていたので、調理作業か農業に進むことを考えていましたが、調理作業では包丁を使う点が難しく、農業を選ぶこととなりました。この地域に畑は多いのですが、家族経営が多く、農家が障害者を直接雇用する事例は多くありません。そんな中、パーソルダイバース(株)よこすか・みうら岬工房が農福連携に取り組むということで、同社での現場実習を打診しましたが、当時は、雇用枠がなかったため断念し、別の所に実習に行きました。</p> <p>武山支援学校 進路担当</p>
3年生	<p>2年生後期の現場実習を踏まえて、「やはり農業分野に就職したい」ということとなり3年生の前期及び後期は、パーソルダイバース(株)で現場実習を実施。</p> <p>清水さんと面談を重ねていく中で、本人が農業を希望していたため、もう一度農業分野での就職を考えることになりました。その中で、パーソルダイバース(株)がよこすか・みうら岬工房が第二の拠点を立ち上げることになったため、再度、同社に打診し、現場実習の受け入れが実現しました。</p> <p>武山支援学校 進路担当</p>
卒業後	4月にパーソルダイバース(株)へ入社

清水さんのパーソルダイバース(株)での現場実習の内容

パーソルダイバース(株)よこすか・みうら岬工房の業務受託先である(株)ピーカブーでのカブの収穫・洗浄作業や、観光農園でのメロンの梱包作業等を実施。

【パーソルダイバース(株)における現場実習の流れ】

- ・初日 実習内容や目標の確認
- ・毎日 現場作業
現場実習後の片づけ・着替え後に、1日の振り返り
- ・最終日 現場実習後、パーソルダイバース実習担当者、本人、進路担当(担任も同伴あり)、保護者と実習の振り返り
- ・実習後 1週間前後で、評価表をパーソルダイバース(株)から学校側に送付

事前に、実習にむけた配慮事項、本人の特性、これまでの学校での訓練や職場実習の様子を学校から伺い、実習内容を決めます。(例えば、複数の説明を同時に言われると理解しにくい場合は、1つの作業に、1つの説明を出すようにするなど。)

パーソルダイバース(株)
現場マネージャー

現場実習を通したそれぞれの声

- 3年生の現場実習でパーソルダイバース(株)の作業に参加した際は、カブの調整作業が得意だと感じました。
- 実習を受けたことで、農業のイメージが変わりました。予想通りの作業もありましたが、収穫の量が思っていたよりも多く、より興味が湧きました。
- 現場実習で一緒に作業する社員が優しくかったことや指導スタッフが親切だったことが印象に残っています。(就職先にパーソルダイバース(株)を選ぶことになったきっかけの一つ)



清水さん

外での活動を苦しめない、規則正しい生活ができる、立って作業を長時間できる生徒が農業分野に向いていると感じます。
清水さんの場合は、農業に向いており、現場実習の中で、清水さんの実力が認められ、就職に至ったと思います。



武山支援学校
進路担当

挨拶、他者への思いやりといった働くことへの誠実さや、働くことへの向上心や意欲があることが、弊社の農業事業に親和性があると思いました。



パーソルダイバース(株)
現場マネジャー

現場実習の重要性

私たちの目からは能力的に長けてると思っていても、企業側からしたら「ここは難しい」となったり、逆に、**私たちから見て、力が不足していると思っていても、企業様からは『これなら働くのに十分です』**、と書いていただけることもあります。見る視点によって働く力の感じ方が変わるので、実習を通してそういった観点で必ず評価をいただいています。

生徒たちも実習に出ることによって第三者の方に何が必要かを言ってもらい、それが彼らの成長に繋がるため、実習は欠かせないと感じます。



武山支援学校
進路担当

参考1: 神奈川県立武山支援学校のキャリア教育・支援の取組内容の詳細

◆職業(授業科目)

神奈川県立武山支援学校では、農園芸班と革工芸班に分かれて、職業の練習を行っています。

1年生の時は両方とも体験し、2年生になる際にどちらかの班を選択します。

農園芸班では、校内の一部を畑にし、農業を体験できる環境を整えています。

◆2年生前期のグループ実習

- 位置づけ: 生徒自身が自分の適性(向き不向きや好き嫌い)を見つけるための職業体験
- 期間: 3週間
- 体制: 生徒4,5名で1グループ×3企業
- 流れ:
 - 訪問先企業が3企業あり、1週間ごとに訪問先をローテーションし実習を行う。
 - 1週間のうち、水曜日～金曜日に企業での実習、月曜日・火曜日に振り返り会を実施し、工夫できる点や次回の実習で活かせる情報共有の場を設けている。
 - 各実習の現場には、教員が付き添う。
 - グループ実習実施に至った経緯:
元々、就労に向けた実習は2年生の11月に行われる個人での現場実習が最初の機会であったが、いきなり個人での実習から始まるという点において課題があり、グループでの実習機会を設けることになった。
- グループ実習の事例:
 - 企業における、PCを使った事務作業や軽作業
 - 老人介護施設における、入浴後の利用者のドライヤーかけやお茶出し
 - 学童保育所における、未就学児を対象にした業務支援
- 企業選びの観点
 - 生徒自身が適性を見出せるように、ジャンルの異なる実習に繋がる企業を選定する。

◆2年生後期の現場実習

- 位置づけ: 就職の方向性を決定するための実習
- 期間: 3～10日間(現場実習は、企業からの提示に合わせた期間で行う)
- 体制: 生徒1名で、1社に実習参加
- 流れ:
 - 神奈川県立武山支援学校が管理する企業リストのうち、生徒の意向に合う企業をいくつかピックアップし、本人に提示する。
 - 生徒から、実習に進む企業の希望を取る。
 - 神奈川県立武山支援学校より企業に対して実習実施の打診を行う。
 - 合意が取れたら、
 - 事前打ち合わせ(実習期間、時間、持ち物など)
 - 本人、保護者に日程打診、内容確認
 - 依頼状提出
 - 現場実習を実施する。
 - 実習期間中に、進路面談も実施する。

- ・ 実習終了後、生徒と保護者を交えた進路面談を実施し、方向性を確定させる。
- ・ 実習内容の決定
 - ・ 業務内容に生徒が対応できるか、必要な力を持っているかを企業に見てもらうため、学校から作業内容の依頼をすることより、企業側が提示した内容に準じることが多い。
- ・ 実習における留意点
 - ・ 実習先の選択肢を提示する際は、企業の特徴だけでなく、配慮してもらえる事柄や、個人で自立的に働けるか等、働き方などを紹介する。
 - ・ 進路担当の教員から「ここが良い」と進めるのではなく、生徒本人にもインターネット等で調べさせ、自分に合っているかどうかを判断してもらう。
- ・ 企業選びの観点
 - ・ 特別支援学校としては、どの企業も、採用を見据えて実習を受け入れてもらえることが望ましいが、実施ハードルを下げるため、2年生の実習については、体験のみの受け入れ可能な企業も含めて絞り込む。

◆3年生前期・後期の現場実習

- ・ 位置づけ:企業とのマッチング、就職先を決定するための実習
- ・ 期間:3～10日間(現場実習は、企業からの提示に合わせた期間で行う)
- ・ 体制:生徒1名で、1社に実習参加
- ・ 流れ:
 - ・ 2年生の12月に実施した進路面談の結果を踏まえて、進路指導担当教員が雇用意向のある企業の中から実習先をリストアップする。
 - ・ 神奈川県立武山支援学校より企業に対して実習実施の打診を行う。
 - ・ 合意が取れたら、
 - ・ 事前打ち合わせ(実習期間、時間、持ち物など)
 - ・ 本人、保護者に日程打診、内容確認
 - ・ 依頼状提出
 - ・ 現場実習を実施する
 - ・ 実習内容の決定
 - ・ これまでの現場実習の様子や本人の特性、配慮事項を企業と学校間ですり合わせたうえで決定する。
 - ・ 配慮事項の例:
 - ・ 複数の説明を同時に言われると理解しにくい場合は、1つの作業に、1つの説明を出すようにするなど。
 - ・ 注意する際は、個別に、周囲に人がいないように、配慮するなど。
- ・ 企業選びの観点
 - ・ 基本的に雇用の枠がある企業を選ぶ。

ステップ3 農業で働く

—農業現場での就労に関するヒアリング—

今回の事業では、複数の特例子会社に聞き取りのうえ、特別支援学校の生徒の現場実習の受け入れ実績や就職実績のある特例子会社「パーソルダイバース(株)」と、社員の出身校である「神奈川県立武山支援学校」にヒアリングを実施しました。

※ヒアリングの目的、実施概要はp15と同様

パーソルダイバース(株)の社員が働く様子

清水さんのパーソルダイバース(株)における業務内容

- ・ 業務時間は、7:45 から 16:15 まで。
- ・ (株)ピーカブーでのカブの収穫洗浄
(10月～翌年5月末の終わりまで)
- ・ 観光農園でのミカンの収穫・出荷作業
- ・ トウモロコシやトマトの木やマルチの片付け



- ・ 業務で大変なことは、量が多い時。
1日に軽トラ11台分のカブを作業することもあります。
- ・ 一緒に働く障害者の社員に教えることにやりがいを感じます。
- ・ カブが収穫できたときに達成感があります。
- ・ 収穫の時に数を数えながら進めていますが、たまに忘れたり数え間違いをしそうになることがあるので、スタッフが一緒に数えてくれる等、サポートしてくれて助かっています。
- ・ 1年を通してほとんど同じ作業なのでやりやすいです。
- ・ **現場実習があったからすんなり現場に入れたと感じています。**
- ・ **今後のキャリアとして、指導員さんのように教えていくことがやりたいです。**
- ・ 説明するときに緊張せずやれるようになりたいです。
言葉が詰まってしまうことがあるので良くしていきたいです。



清水さん

清水さんは他のスタッフをサポートすることもでき、現場をまわす中心人物に近い存在。
「いてもらわないと困る」と農家から大きな期待をもらっています。



パーソルダイバース(株)
現場マネジャー

卒業間際の清水さんであればこの場でヒアリングに答えるのは恐らく難しかったと思います。
在学中に比べて、しゃべったりコミュニケーションを上手にとれるようになりました。農業という仕事を通して教えたいという気持ちが出てきたのは、**この仕事がフィットしているから**なのだと思います。



武山支援学校
進路担当

パーソルダイバース(株)における入社後の研修体制(作業訓練・OJT)

◆社員研修

内容	実施タイミング	形態	所要時間	頻度
入社手続き・研修	入社日～3日目	対面	終日	入社月ごと
新入社員研修 挨拶や社会人マナー	入社後2カ月以内	対面	半日	計4回
コミュニケーションスキル、感情コントロール、ビジネスマナー等	初年度	対面	90分	年4回

◆作業訓練

- ・ 本人の障害特性を考慮して、作業内容を現場スタッフが教えます。
- ・ 月1回の業務振り返りの際に、その月の成果や課題(良かった点、悪かった点、不明なこと、知りたいこと)を振り返り、本人と業務習熟度、理解度の確認を行います。

神奈川県立武山支援学校における就職後の定着に向けた体制

神奈川県立武山支援学校では、卒業後の3年間をアフターフォロー期間とし、就労先での困りごとやトラブルがあった際に、進路指導担当教員がフォローアップに入る体制を築いています。

就職をした1年目のゴールデンウィーク明け頃は、環境が変化してからの疲れや変調が起こりやすいタイミングのため、神奈川県立武山支援学校では、必ず就労先の企業に連絡したり、ヒアリングを実施しています。

アフターフォローを行う際は、企業と支援学校、就労支援センターの三者で情報を整理し、対応内容を検討・指導することになっています。

農業分野での就職の促進に向けて

農業で働きたいと考えている後輩へのメッセージ：

1年を通してやっていくと、色々楽しいことがあるので、農業は楽しくできると思います。一緒に働く障害者の社員や指導員さんが優しく教えてくれるので、楽しく作業できると思います。農家さんから感謝されることが多いのと、収穫して出荷作業までやったときに達成感があります。



清水さん

現状、当校での農業分野での現場実習の受け入れ先は、パーソルダイバース(株)くらいです。農業体験なら受け入れ可能と言ってくれる農家はあると思いますが、雇用まで見据えるとなると、なかなか難しいのが現状です。障害があるというフレーズを聞くだけで、「重たい障害を持っている」とイメージされる企業が多いように感じます。当校では、障害者の雇用希望がある会社には、必ず一度学校を見学してもらい、障害者でも働けるというイメージを持ってもらうようにしています。まずは、**農業関係者と特別支援学校の教員が交流できる場や見学してもらえる機会があると、お互いの理解が深まるのではないかと**思います。



武山支援学校
進路担当

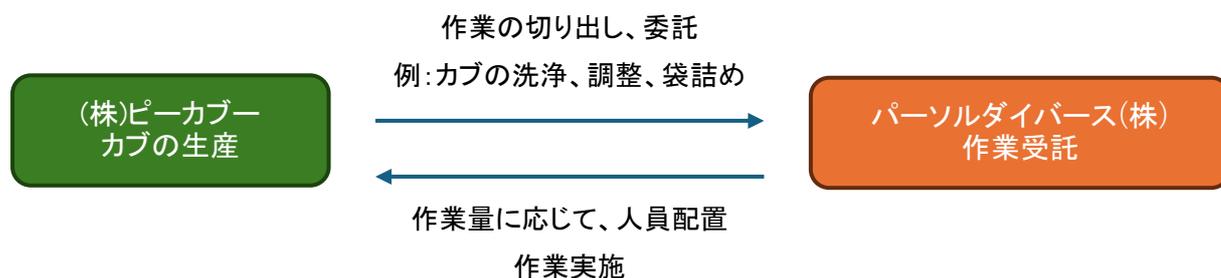
農家と学校の先生がまず会う機会を作っていく、教育分野と農業分野でのマッチングも必要だと感じます。夏期休暇中、生徒は時間があるので、農家側がアルバイトとして生徒を雇えば、雇用のハードルも下がるかもしれません。



パーソルダイバース(株)
現場マネジャー

参考: パーソルダイバース(株) × (株)ピーカブーの連携について

パーソルダイバース(株)が業務受託している農家の1人である(株)ピーカブーとの連携についてご紹介します。



◆(株)ピーカブー(神奈川県三浦市、代表 石井 亮)

元々は、大根やキャベツ、スイカなどを含め露地野菜を中心にさまざまな作物を生産する農家。

10年ほど前から、重量野菜から小物野菜の転換を図るため、カブのブランディングと法人化を進め、同社を令和2(2020)年に設立。パーソルダイバース(株)との農福連携を行い、ノウフク・アワード 2025 では優秀賞を受賞。農福連携の可能性を、経営を通じて発信しています。

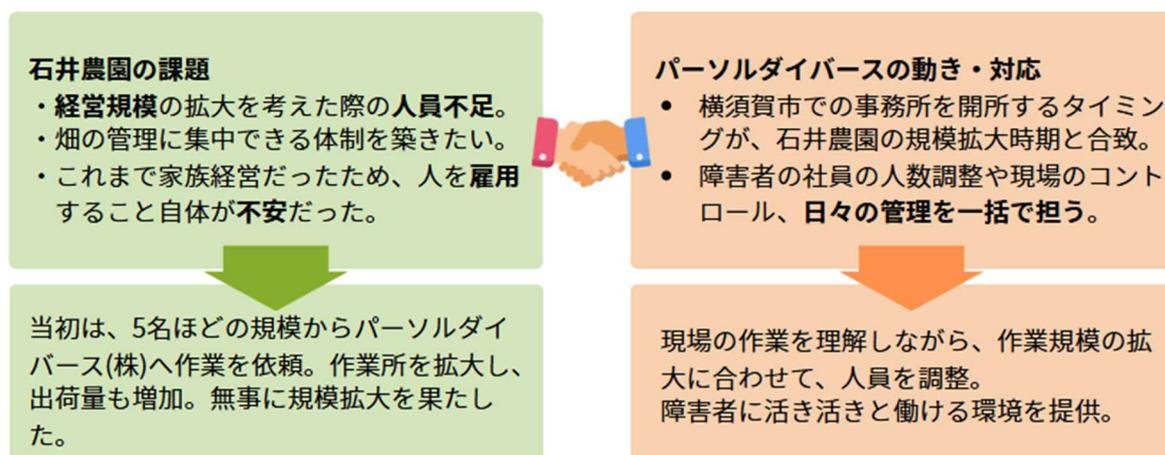
◆パーソルダイバース(株)と(株)ピーカブーの連携経緯(石井さん)

令和元(2019)年ごろ、石井農園((株)ピーカブーの元となる農家)が規模を拡大するタイミングと、パーソルダイバース(株)の長沢事業所立ち上げ時期が重なったことをきっかけにお付き合いが始まりました。

当初は模索の連続でしたが、年数を重ねるごとにスタイルが確立されました。

当初は大根やキャベツを生産しながら同社とのお付き合いをしておりましたが、途中からカブ専門の生産に切り替え、規模を拡大するタイミングで作業の一部を依頼することになりました。

最初は5名程度の受け入れからスタートし、今では平均12,13名ほどになりました。



農福連携を始めた農家の感想・これまでとの変化

これまで家族経営だった石井農園。パーソルダイバース(株)との連携を始めた際の心境や変化を、(株)ピーカブー代表の石井さんに伺いました。

Q. 最初の印象や障害者の受け入れへの不安はありましたか？

A. 最初は正直不安しかありませんでした。そもそもカブをやり始める前は家族経営だけでやっていて、初めて、パートタイム労働者を2~3名雇い入れたところに、パーソルダイバース(株)から農福連携のお話を聞き、実際にビジネスとして成り立つのか検討を始めました。

障害者の方が、どこからどこまで仕事をできるかはやり始めてみないと全くわからなかったのが、最初の数年はパーソルダイバース(株)の現場マネジャーと話をしながら、一緒に成長させていただき、今では不安はなくなりました。

Q. パーソルダイバース(株)との連携で助かっているのはどのような点ですか？

A. 基本的にお願ひした時間内で作業を終わらせてくれます。また、カブを秀品・優品・B品に選別する作業も障害者の方は、とても厳しい目で選別してくれます。彼らのおかげで、品質の良いカブを出荷することができ、ブランド価値を上げてくれています。

Q. 障害特性に配慮した作業の工夫があれば教えてください。

現在使っている作業場を作る際には、障害者が作業しやすいことを念頭に設計しました。

以前の作業台は、腰を曲げなければいけない高さの物や背伸びをして使用する物でバラバラでしたので、障害者が立つて作業しやすい台の高さに統一しました。

Q. 農福連携を始めたことによる効果や影響はありましたか？

A. 農福連携で調整作業をお願いすることで、私自身が畑にいる時間が圧倒的に長くなり、カブの栽培管理が行き届くようになりました。これにより、品質が向上しました。

また、商談にあてる時間を持つこともでき、販路拡大や売上向上にもつながっています。

(株)ピーカブーの作業場



(株)ピーカブーが生産・ブランディングしている三浦かぶ



ステップ2 農業を学ぶ・ステップ3 農業で働く —まとめ—

ヒアリング結果を踏まえて、今回の事例のポイントをまとめました。

今回の事例のポイント

【現場実習の効果】

特別支援学校

○それぞれの生徒に合った就職先の提案につながる

生徒本人がやりたい仕事を選ぶ材料として、現場実習が重要な機会につながっています。
今回の事例では、清水さん自身が農業分野での就職を希望し、その意向に基づいて、実習先が決まりました。

特例子会社

○就職先にマッチした人材の確保につながる

現場実習を実施することで、特別支援学校の生徒の働く力や特性を実際の業務を通じて確認でき、現場で活躍できる人材を見極めることができます。
今回の事例では、清水さんの実習での誠実さや、働くことへの向上心や意欲があることが、パーソルダイバース(株)の農業事業に親和性があると評価され、採用につながりました。

【現場実習を円滑に実施するためのポイント】

特別支援学校

特例子会社

○特別支援学校の生徒の特性や配慮事項を事前に学校と企業で共有・確認する

生徒の特性や配慮事項を、事前のヒアリングやすり合わせでしっかりと共有・確認することが重要です。

特例子会社

○配慮事項を踏まえた実習内容を実施する

企業は、生徒の特性や配慮事項を踏まえて、作業内容や指示方法を調整することが大切です。
今回の事例のパーソルダイバース(株)では、例えば複数の説明を同時に受けると理解が難しい場合には、1つの作業に1つの説明を出すなど、配慮事項を踏まえて実習内容や伝え方を工夫しながら受け入れを行っています。

【現場実習から就労につなげるためのポイント】

特例子会社

○雇用を見据えた場として、本来の業務内容に準じて実習を実施する

企業は、雇用を見据えて、本来の業務内容に準じて実習を実施することが大切です。
今回の事例では、パーソルダイバース(株)が業務受託している農家で、カブの収穫や洗浄など、就職後と同様の作業を実習することで、清水さんは就職後の仕事内容を具体的にイメージできるとともに、パーソルダイバース(株)も採用後のミスマッチを防ぐ判断材料を得ることができ、清水さんの就職後の活躍に繋がっています。

【農業分野での障害者の活躍】

特例子会社

○「いてもらわないと困る」存在として活躍している

清水さんは、就職後もカブの収穫や洗浄などの作業で活躍しており、現在は他の障害者の社員をサポートすることもできる現場を回す中心人物に近い存在へと成長しています。農家から「いてもらわないと困る」と大きな期待をもらっており、現場実習を経て清水さんに合う職場に就職できたことが現在の活躍につながっています。

【農業分野での就職の促進に向けて】

特別支援学校

○農業に興味を持つきっかけを創出する

今回の事例では、清水さんは、授業で実施した農作業が農業に興味を持つきっかけとなり、農業分野での就労を志すようになりました。このように、校内や近隣の畑などでの農業体験の成果が農業に興味を持つきっかけづくりにつながります。

農林水産省 HP では、特別支援学校における校内学習や作業学習への支援（体験の場の提供、農業に関する技術的な助言等）が可能な農業法人、障害者就労施設、特例子会社等や、農業大学校における特別支援学校を対象とした取組等を情報提供しています。

▼農林水産省 HP: 特別支援学校の生徒の農業分野での就労促進

https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/tokushi_syuurou.html



特別支援学校

特例子会社

○農家と特別支援学校の先生が出会う機会を作っていくことが重要である

農業分野での就労を促進するには、農家側が障害理解を深め「障害のある生徒も働ける」と感じられる機会と、学校側が農業現場を理解する機会を作っていくことが必要です。そのため、双方が交流・見学できる場を設け、お互いの理解を深めることが重要です。

農林水産省 HP では、特別支援学校の生徒の就労実績があつたり、現場実習の受け入れが可能な農業法人、障害者就労施設、特例子会社等の情報提供をしています。

▼農林水産省 HP: 特別支援学校の生徒の農業分野での就労促進

https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/tokushi_syuurou.html



さいごに

農林水産省 HP では以下の情報等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【農林水産省 HP に掲載している情報】

○特別支援学校の生徒の農業分野での就労の促進に向けた情報

- ・ 農業大学校における特別支援学校を対象とした取組や、相談の可否などをとりまとめた一覧
- ・ 特別支援学校の生徒の就労実績があったり、現場実習の受け入れ、特別支援学校における校内学習や作業実習への支援(体験の場の提供、農業に関する技術的な助言等)が可能な農業法人、障害者就労施設、特例子会社などを掲載しています。

○農福連携に関連するパンフレット・マニュアル

各種パンフレット・マニュアル、取組事例等を掲載しています。

○農福連携等応援コンソーシアム

同コンソーシアムでは「ノウフク・アワード」の選定による優良事例の表彰・全国への横展開や、農福連携等を普及・啓発するためのイベントの開催、農福連携等に関する情報提供などを行っています。【入会無料】

▼農林水産省 HP: 農福連携の推進

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/index.html>



■本冊子に関して

本冊子並びに、冊子の説明動画を以下のサイトで公開中です。

▼農林水産省 HP: 特別支援学校の生徒の農業分野での就労促進

https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/tokushi_syuurou.html



▼一般社団法人農福連携協会 HP

①説明動画:<https://x.gd/8xNey>

②冊子データ:<https://x.gd/uDMU4>



①



②

発行日:令和8年3月9日

制作:一般社団法人日本農福連携協会

株式会社マイファーム

この資料は農林水産省「令和7年度農山漁村振興交付金」を活用して作成しました